

2023年7月2日 主日礼拝

説教題「賛美の源泉～赦し～」 マタイによる福音書 6章9～13節

主任牧師 加藤 誠

「わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」(マタイ6章12節)。

主イエスが教えてくださった「主の祈り」の第四の祈り（我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく…）は、声に出して祈ることに難しさを覚える祈りです。ウクライナの方が「敵を赦しなさいとずっと教えられてきたけれど、目の前に起こっている現実をみると、赦すことはほんとうに難しい」と言われていました。「主の祈り」がもし「わたしたちの負い目を赦してください」という祈りだけなら祈りやすいのですが、「わたしたちも…赦しましたように」という祈りとセットになっているために、どうしても声が小さくなってしまうのです。なぜ「罪を赦してください」と「私たちも罪を赦します(ました)」という祈りはつなげられているのでしょうか。

この「主の祈り」を毎週の礼拝でささげる中で「自分も相手を赦そう！」と具体的行動に促された女性がいました。映画『シークレット・サンシャイン』の主人公の女性です。彼女は夫を事故で失い、さらに幼い息子を誘拐された挙句に殺されてしまいます。犯人は逮捕されましたが、彼女の怒りと悲しみは収まりません。周囲の人びとの慰めも素通りするばかり。ある時、友人に誘われて教会に行き、この悲しみを受け取ってくれるのは神さましかいないと気づいて信仰の道に入ります。聖書の話の聴き、賛美歌を歌い、共に「主の祈り」をささげながら、神さまの「汝の敵を赦し、愛せ」という言葉が迫ってきます。そして「自分も犯人を赦そう、神の赦しを伝えよう」と、まわりの反対を押し切って刑務所に面会を申し込むのです。犯人と向き合い、女性が「あなたを赦す」と言おうとしたとき、思いがけないことが起こります。犯人は柔和な笑みを浮かべ、自分もまた刑務所で神と出会い、自分の罪を懺悔（ざんげ）したといい、至福の表情でこう言ったのです。

「神はこの罪人に手を差し伸べ、懺悔を聞き、罪を赦したのです」「神が罪を赦したですって?」「涙を流して懺悔し、神の赦しを得ました。そして心の平安が訪れました。起きると祈りを捧げ、毎日感謝して過ごしています」

自分が赦す前に神は息子を殺した犯人を赦していた。わたしが赦していないのに、なぜ神は赦したのか。わたしが苦しんでいた時、犯人は神に赦されて救われていたなんて…。母親は茫然とし、口から出かけていた赦しの言葉を飲み込みます…。

このあとの映画の展開は省略しますが、この犯人が神から受け取ったという「赦し」を皆さんはどう思われますか。確かにイエス・キリストの十字架において私たちはすべての罪を赦されている。これが聖書の宣言です。しかし、わたしが大きな違和感を覚えるのは、この犯人が母親を目の前にしながら何の良心の呵責も覚えていない点です。自分の罪が彼女をどれほど悲しませてしまったのかを考えることができている。自分だけ「神に赦された平安の至福」に酔っている。神は見えてい

るのかもしれないけれど、目の前の母親が見えていない。自分と神だけで完結している世界。これがイエス・キリストが教えられた「神の赦し」なのではないでしょうか。

結論から言うと、主イエスの十字架の赦しは「私たちの罪を示しながらの赦し」であり、「私たちが神の愛に立ち帰ることを祈りながらの赦し」であり、同時に「私たちが隣り人との壊れた関係をもう一度新しく紡ぎ直していくことを願っての赦し」です。この映画の話で言うなら、主イエスはこの犯人の取り返しのつかない罪を十字架において引き受け、赦されます。しかし、それはこの犯人が自ら犯した罪ときちんと向かい合い、深い悲しみを与えてしまった母親に「ほんとうに申し訳ない」という心からのお詫びを伝えられるようになることを祈っての赦しだ…ということです。例えば、ルワンダの佐々木和之さんがたびたび紹介されているサラビアナさんという女性がおられます。大虐殺でご自身の身体に深い傷を負い、悲しみと痛みを背負って生きてこられた方です。その彼女が自分を傷つけた人びとを前にこう語りかけています。「わたしはあなたを赦します。ですからあなたはきちんと自分の罪と向かい合ってください。あなたが自分の罪と向かい合うことができていない間は、赦しを語ることはできません」と。「きちんと謝ったら赦してあげる」ではないのです。「赦している。だからきちんと自分の罪と向かい合ってください」というのです。つまり、イエス・キリストの十字架の赦しは、私たちが神の愛に立ち帰ると共に、こんどは自分たちお互いの間で「壊れてしまった関係」を神の愛に基づいて新しく紡ぎ直していくことを祈り願っての「赦し」なのです。

「主の祈り」の第四の祈りが、なぜ「私たちの負い目（罪）を赦してください」という言葉に続いて「私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように」という言葉が続いているのか。それは「神の赦し」と「私たちお互いの間の赦し」とが決して切り離すことのできないものだからです。私たちは「神の赦し」だけを自分に都合よく受け取ることはできない。「神の赦し」を受け取る者は「神さま、あなたの愛と赦しにふさわしい、隣り人との関係を創り出すことができますように。あなたの聖霊の導きを注いでください」と祈らざるを得ないのです。

ただ、それでも私たちにとって「赦すこと」はとても難しいことには変わりはありません。特に不当な憎しみをもって理不尽な攻撃をしてくる相手をどのように「赦す」ことができるのでしょうか。そのとき使徒パウロのローマ 12 章 14 節、19 節以下がヒントになるかもしれません。パウロは言います。「迫害する者を呪うのではなく、祝福（神の伴い）を祈れ。自分で復讐しよう（裁こう）とせず、神の怒り（神の裁き）に委ねよ」と。自分の「正義」で相手を裁くのではなく、神の伴いと導き、神の正しい裁きを祈る。「十字架の主イエスのように赦す」ことはできなくても、祈ることから始めていく。その時、私たちは「自分を迫害する相手」のために祈られる主イエスの姿と共に、「どうしても赦せない私たち」のためにも祈り続けておられる十字架の主の姿に気づかされていくのではないのでしょうか。